

プロジェクトアドベンチャーの手法を生かした学級経営や学校経営

—「協働」を基盤とした実践の見直しと授業評価を中心に—

高知市立介良潮見台小学校 教諭 利岡理香

プロジェクトアドベンチャーの手法を生かした授業づくりと「人とかかわる楽しさ」「考える楽しさ」を大切に進めてきた。教科学習に生かす視点について提案したい。授業研究の持ち方についての十分な検討までには至っていないが、話し合いの場の設定と運営を工夫することで教師自身の気づきと行動化が促進されることに注目したい。そこに子どもの学びを支える「協働」の意識を図るためのヒントがあると思われる。

キーワード：プロジェクトアドベンチャー、教科学習に生かす、かかわり合い、個と全体、協働

1 はじめに

これまで、プロジェクトアドベンチャー（以下PAとする）の考え方を生かし、自他のよさを認めながら生き生きと活動し共に高め合うことのできる子ども、すなわち「生きる力」を持った子どもの育成を願って学級経営や学校経営に取り組んできた。PAのアクティビティを中心に活動する時間である「なかま」の時間での学習や、安心感が持てる人間関係づくりを大切にしたい学級経営、心も体も安全な学校づくりにむけた職場づくりなどである。しかし、子どもたちの実態をみると、自尊感情の低さやなかまとのかかわり方の未熟さ、学習意欲の低さ、モラルや規範意識の低さなどが感じられる。それらは子どもたちが高学年になるにしたがって強く感じられ、思春期の入り口である小学校高学年の子どもたちからは「学ぶ」意欲の低下をひしひしと感じる。グループカウンセリングの手法でもあるPAを子どもたちの人間関係づくりに生かしながら、教科学習においても子どもたちが自己実現できる実感を持てる取組がなされなければならない。「学ぶ」ことを今一度考え直す時期に来ている。

これまでの授業を見直しPAの考え方を生かしながら授業づくりをする過程で、これからの学習に必要な視点が明らかになり評価項目を作っていくことができるであろう。また、子どもたちの姿や活動を見取る教師同士の視点の確かめ合いにより、「協働」の意識が培われ、ひいてはよりよい学級経営・学校経営を行うことができるのではないかと。

2 研究目的

- (1) PAを取り入れたこれまでの実践をふりかえり、課題を明らかにして子どもたちが生き生きと活動する学校づくりを進める。
- (2) PAの考え方を生かした評価項目をもとに、「楽しさ」の視点と「かかわり合い」の視点を基に授業づくりを進める。

3 研究内容

(1) 授業づくり

① 「なかま」の時間

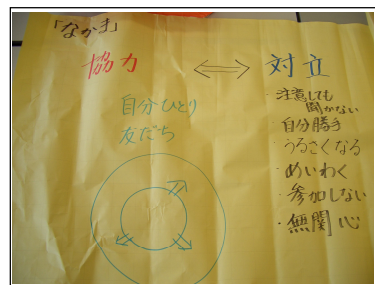
在籍校において高学年の「なかま」の時間のT1として学習を進めた。クラス全体での活動より2人組や学習班での少人数単位での活動を主として取り入れ、10時間計画で行った。取組前の子どもたちの意識調査では、「なかま」の時間は協力について考える時間だという声が多かった。そこで、協力ができていない状態を「対立」ととらえることにした。人とかかわる際にどのような場面で対立が起きやすいかを体験することによって、自分自身の日常をふりかえりコミュニケーションスキルを高める必要性を感じてほしいと考えた。

ア 実施内容

回	月日	ねらい	主な内容
1	9月14日 (火)	・「なかま」の時間のねらいを確認する。	・一人一人が考えをワークシートに書く。 ・『木と家と人』
2	10月12日 (火)	・「協力」と「対立」コミュニケーションをとることの難しさを感じる。	・前時のふりかえりをして「協力」について考える。 ・『アリの絵』を2人組で描く。
3	11月2日 (火)	・言葉で伝えることの難しさや自分の気持ちに気づく。	・『Z o o m』 ・「対立」を減らすための方法を考える。
4	11月9日 (火)	・言葉以外のコミュニケーションの大切さに気づく。	・『クロス・アングロス』 ・『ジェスチャーで伝えよう。』
5	11月30日 (火)	・自分の感情に気づき、その表現のしかたについて考える。	・『感情を表すパネル』 ・感情の表現方法について考える。
6	12月7日 (火)	・友だちの感情に気づき、その時の行動について考える。	・『釘のパズル』 1本の釘の上に12本の釘をのせる問題に友だちと共にチャレンジする。
7	12月14日 (火)	・先入観や偏見、差別について考え、多様性を受け入れるとはどのようなことか考える。	・『私たちの住む街並み』 ・『クロちゃん危機一髪』
8	1月18日 (火)		・『異文化紹介ブレイクストーミング』 ・『9画の漢字』
9	1月25日 (火)	・「対立」を減らすための方法を考え、行動する。	・『スパイダーズウェブ』
10	2月1日 (火)	・自分と友だちとの関係に目を向け、すすんで行動しようとする。	・『吹雪の中のレスキュー隊』 ・『島めぐり』

イ 授業後の子どもたちのふりかえりシート・板書の一部より

- ・言葉の難しさを教えられた。今後この経験をふまえて、おしゃべり上手になっていきたい。
- ・人によって違う意見がたくさん出た。三人集まれば文殊の知恵というだけに、みんなで作るとたくさんの発見があった。
- ・……次もグループでやるなら、こんなにしていきたい。



② PAを生かした教科学習—第2学年「かけ算」の学習を通して—

「かけ算」は2年生の算数学習での主要な内容の一つであると言っていいだろう。ややもすると九九の暗唱に注意が向きがちだ。確かに九九は覚えて早く使いこなすことができればいいのだが、算数の多くの時間が九九の暗記や暗唱に使われるのでは、子どもたちにつけさせたい「考える力」や「生きて働く力」は育てることができないのではないだろうか。

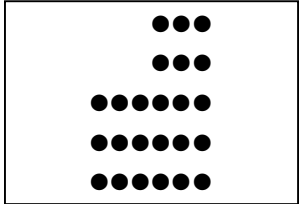

そこで、九九を覚えるのではなく作り出していくことを大切にすることによって、その過程でのかけ算の意味やきまりについての気づきを一人ひとりの子どもが持つことを「学び」と考えた。

また、友だちとのかかわり合いのことを考えると、子どもたちは2年生になって学校やクラスに慣れ、周囲の様子も分かるようになってきた。また一学期の子どもたちの様子から2人組の活

動を意識して取り入れてきた。しかし、学習の場で自分の考えを自分の言葉で伝えるという活動は40人学級という人数の多さでは保障できていないのが現状である。聞き合う活動を大切にするには、低学年から自分の意見を言う、相手の意見を聞くと言う活動を大切にしていかなければならない。しかもそれは大勢の人数を相手にする発表ではなく、ごく近い感情が伝わる距離で行われなければならないと考える。そこで算数の学習でも2人組での活動を意識して取り入れ、話し合ったり聞き合ったりする活動を大事にしていこうと考えた。

ア 第18時の学習の実際（第7回検証授業）

- 目標…問題解決に向けて、積極的に自分の考えを書いたり友だちに話したりする。
- 学習の流れ

学習活動	支援と評価	備考
<p>1. 絵を見て、これまでに学習した九九を使って問題が解けそうだという見通しを持つ。 「たこ焼きは全部で何個ですか？」</p> <div data-bbox="371 709 667 911" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">  </div> <p>2. 並び方を確かめるために、どこに着目して数を数えるのか、隣の席の友だちと考えを出し合う。 ・決まった考えを「作戦シート」に書く。</p> <p>3. 何個並んでいるのかわかるために、早く数える方法を考える。 ・おはじきを動かしながら考える。 ・数えやすくするための工夫をシートに書く。 ・(絵を見る) ・式に表しながら、数を確認する。</p> <p>4. 隣の席の友だち同士で、自分の考えを話す。</p> <p>5. クラスでいろいろな考え方ができたことを知り合う。</p> <p>6. ふりかえりをする。 ・シートに思ったことやわかったことなどの気づきを書く。</p>	<p>・絵全体はフラッシュカードのように一瞬しか見せない。 ◎「1列に□こずつの○列分」という乗法が適用される場面とらえているか。</p> <div data-bbox="826 709 1208 974" style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">-学習の様子-(写真1)</p> <p>◇2人組のかかわり ・おはじきを置いて考えるようにさせる。</p> <p>・1列分を線で囲む。 ・個への励ましや助言をする。</p> <p>◎おはじきの並びや動きに対応させて式に表すようにさせる。</p> <p>◇2人組で考えを出し合わせる。 ・おはじきを置いて、動かしながら話すことで、自分の考えを確かにする。</p> <p>・提示用おはじきを貼りながら、意見を出し合う。 ・シートの写しを板書することによって、自分の考えと比べながら聞くようにさせる。</p>	<p>絵 数カード 絵カード</p> <p>おはじき</p> <p>シート拡大版</p>

○提案

【追究する力《モノとのかかわり》】

かけ算（1）のまとめとして、問題（→課題）は子どもたちの学びを深めるものであったか。

⇒ 1時間の学習に意欲的に取り組み続ける姿が見られたか。

【共に生きる力《人とのかかわり》】

かけ算（1）では子どもたちが2人組で話す場面を意識してつくってきた。この活動は学びを深めたり友だちとのかかわりを深めたりするのに有効だったか。

⇒ 友だちとなかよく話し合う姿が見られたか。

【表現する力《自分とのかかわり》】

問題解決に向けて、友だちに話す（聞く）・おはじきを使って考える・考えたことを図や式やことばで表すことを大切にしてきた。その手段としてのシートの活用は適切だったか。

⇒ 自分の考えを絵や図や文で表そうとする姿が見られたか。

イ 授業を終えて－授業研究での教師のふりかえりより－

- ・準備がしっかりできていてよかった。1時間の学習を考えると、「導入段階で子どもをひきつける・展開でかかわり合いをつくる・まとめで自分をふりかえる」が大切だが、それぞれの段階でよく工夫されていた。たこ焼きの話題や作戦カードは子どもたちをひきつけ、意欲を高めた。また、一瞬しか絵を見せなかったり、見せる時に右下端のほうから数を確認させるようにゆっくりと見せていったりする工夫もよく考えられていた。
- ・隠されたおはじきの数を考える際、おはじきの数は違っていても、列で考える・同数のかたまりで考えるというかけ算でねらっていることはできてきた。おはじきなどの具体物の操作を取り入れたことで、学習に対して意欲的に取り組んでいた。提示物などの子も興味を持って学習ができるよう工夫され、子どもたちは新しいかけ算の学習に進むのを楽しみにしていた。
- ・「作戦」という場の設定が活動を楽しくし、子ども同士の話し合いも自然に生まれてきた。
- ・2人組のかかわりを多くとってきたので、作戦タイムと言った時にすぐ話し合いができるようになってきた。友だちの意見を聞き合うということはおとなでも難しいことだが、自分の考えを一生懸命説明している姿や隣の子の目を見ながら聞いている姿はほほえましい。（写真1、2）
- ・子どもたちは自分なりの表現で書いたり、おはじきを動かしたり、友だちに説明することに挑戦してきた。まだまだ十分ではないが、適切な評価を入れながら子どもたちのやる気を高め、これからも自信を持たせる取組を続けたい。かけ算の学習では子どもの思考が見えるような「書く・操作する・話し合う」活動だった。
- ・「2人のかかわり合い」をねらいとするならば、かかわり合いへの評価をしっかりと入れていくほうが良い。教師3人の役割分担をはっきりさせ、一人が全体的な指導、もう1人が子ども同士のかわり合い、あとの1人が個への支援をするといった形もある。子ども同士がかかわっている場面をしっかりと見取って、その場でほめてあげるのも良いのではないか。



（写真2）



ウ 在籍校の取組とかかわって

本研究において、授業づくりでは「なかまとのかかわり」を重視した。取組をふりかえった第2学年担任から「聞き合う活動が他の学習場面でも見られるようになった。見る・聞く・話す・待つ（受け入れる）といった活動を繰り返すことで、少しずつ人とのかかわり方を学んでいると感じる。これからは授業の中では聞き合う姿勢を育てていきたいし、生活の中では譲り合うことや意思表示することを大切にしていきたい。」という感想をいただいた。一学期に第2学年が公開した授業研での子どもたちの姿から、かかわり合う力を高めることが課題であることと、担任の先生方と話し合ってから本研究での授業づくりに取り組むことができた。

在籍校では、各学年一授業公開の授業研（全七回）の他にも次のような取組がされている。

- ・全学年Q-Uアンケート実施
- ・学校独自の自己像アンケート実施
- ・アンケート結果の分析と具体的な改善点の検討
- ・教職員PA研修3回（8月23日にはPAJ講師による一日研修）

Q-Uアンケート実施にあたっては、本年度は四年生以上がアンケートを実施するという高知市の取組に伴い、一年生から三年生まで加えた全学年で実施した。また、Q-Uアンケートについて講師を招いた研修を二回行い、アンケート結果の検討は二回に分け全教職員で全クラスのものを行っている。

(2) 協働する教師集団を目指した実践事例についての考察

—アメリカ、マサチューセッツ州のミドルスクールの取組から—（※1）

① Waring Middle School（※2）

ア 教師の「協働」の意識を育む話し合い活動

年度当初に教師全員で学校の方針と生徒支援の方針の2点について共通理解をする。

大きな方針として、次のことを確認して取り組んでいる。

- ・「個から成り立つコミュニティーである」ことを意識する。
- ・「つながり」を意識し「共同体をつくる」ということを大切にする。
- ・具体的な支援の仕方…ハンズオンで学ぶ、2人組で学ぶ。

イ 「個と全体」を常に意識した教育活動

毎月1回、全校生徒、全教職員が参加するミーティングを持つ。テーマは「コミュニティー」としており、訪問当日はその月のテーマ「フランスの哲学」として外部講師による講演だった。第6年生からの全校生徒が思い思いの格好で静かに耳を傾ける姿が印象的だった。前月は「大統領選挙」をテーマとして模擬選挙をしたそうだ。全校で学ぶ価値があると考えられるものは、すぐにみんなでやるようにしているとのことだった。

このように全体で学習することもあれば、毎日第3校時はフランス語と数学の個別学習があり、全校生徒をグループ分けして小グループで学習している。訪問時には一対一で学習している生徒も見られた。子ども同士の関係がぎくしゃくしないか心配したが、ランク付けするわけではなく、自分の力を見つめどのようにして力をつけるか生徒・保護者・教師の三者でよく話し合いながら進めているとのことだった。

10年生の美術の学習では、一人一人の描く絵がどれも個性的でクラス内にどれ一つとして同じ絵がなかった。授業の流れは、1人→互いに見合って意見を出し合う→1人→クラス全体で見合って意見を出し合うというように、個と全体での活動がうまくかかわり合いながら進んでいった。8年生の美術の時間でも同じような流れの学習であったが、意見を出し合う際には「私は…と感じる。」「私は…と考える。」のような発言で、技巧の優劣を競ったり評価したりするのではなく自分自身にとってどうなのかをクラス全員に語っていた。このようなふりかえりの仕方はPAのフィードバック（※3）とも通じるもので、安心感のある時間だった。

② Solomon Lowenberg Middle School (※4)

ア 教師の「協働」の意識を育む「ミニレッスン」

一人一人の生徒の力を育てる取組がされており、各教科の授業も教師の個性が活かされている。自分の受け持つ生徒に州の教科書が合わないと感じ他の州の実践事例を取り入れている先生もいた。どの教科も教科の学習内容に対する目標はあるものの、クラスで確認する単位時間の目標の中には「協力」「チームワーク」の言葉があった。また、活動も個人→グループ→全体と単位時間の中に工夫して取り入れられていた。

様々な取組のなかで、特筆すべきは教師の「ミニレッスン」と呼ばれるものだ。生徒の力を伸ばすための一つの方策だが、訪問した際には、コンピュータ担当・体育担当などの教科の異なる先生方が、研修担当ジェフ Jeff Slater さんの司会のもと、生徒が作った3篇の詩を読み合いながら、生徒の表現力についてそれぞれが気づいたことを出し合っていた。(写真3)。



(写真3)

感想を出し合うなかで生徒たちの獲得すべき言語や環境について各々が課題を自分で持ち帰り、次からの自分の授業実践に生かすのである。ここでの司会は Jeff で、彼はここが問題だとかこうあるべきなどの具体的な示唆は避けている。話し合いに参加した教師の意見交換をスムーズにするために時々話すぐらいである。彼は教育委員会から派遣されていて、毎週水曜日と木曜日に本校に来ている。月曜火曜は担当しているもう一つの学校へ行き、金曜日は2校の教師相手にカウンセリングを行っている。このような教師がグループに分かれて研修を行なう部屋は、壁に教師の相互理解のための話し合いの結果とでもいうべき目標(ビーイング)が貼られていて、教師の意見交換の過程が見て取れる。また、部屋には話題になるテーマに関する専門書やリーフレットが並べられている(写真4)。

イ 特別支援と学校システム

生徒の言語獲得のための学習で、意欲を高めたり支援したりするために「Read 180」(※5)を使った取組が特別支援教室の2クラスで実施されていた。ボストンでこのシステムを取り入れている10例のうち2例が本校に置かれている。

また、ハーバード大学の教育プログラムとも連携しており、研究家(ハーバード大学教育学部の教授)が本校に定期的に来校し、総合教育・体験教育プログラム及び保護者教育をインターン学生と共に本校と連携した取組をしている。



(写真4)

5 研究の成果

佐藤学氏によると「学び」には次の三つのかかわりが必要である。三つとは「モノやコト、仲間、自分」とのかかわりである。(※6) P A J の難波克己氏も授業は「新しいことを知る楽しさ」「なかまとかかわる楽しさ」「自分が大きくなる楽しさ」が感じられなければならないとしている(※7)。佐藤氏、難波氏とも子どもたちが向き合う「対象・仲間・自分」は共通している。そこで、授業づくりにはこの三つの視点で考えていった。

特に『なかまとかかわり』では「2人組でかかわり合う」場を必ず設けた。授業のどの段階で2

人組の活動を入れるかは毎時間工夫が必要だったが、効果的に入れることで、子どもたちの課題に対する取組や追究し続ける意欲を持続させることができた。これは「なかまとのかかわり」を積極的に取り入れることで「モノやコトとのかかわり」も深まっていったと言える。また、「2人組でのかかわり」は子どもの主体的な行動を促し、自分の思いや行動をふりかえりやすくなった。このように子ども同士一対一の関係をしっかりとつくっていくことで、学びも深くなり、なかまとのかかわり方にも変化が見られた。これまでの学習では個の知識習得に目が行きがちではなかっただろうか。これからは学習内容への迫り方への評価だけでなく、なかまや自分自身とのかかわり方への評価を入れていくことが望まれる。これを低学年から積み上げていくことによって、子どもたちの変容が期待できるのではないだろうか。

「モノやコト・なかま・自分」との三つのかかわりは介良潮見台小学校の育てたい力の「追究する力」「共に生きる力」「表現する力」にも通じると考えられ、学年の担任団と話し合う際には話を深めやすかった。教師集団が課題を共有して取り組むには、教師同士のかかわり合いが必要である。検証授業では、在籍校の授業研とQ-Uアンケートを生かした取組と合わせて、一人一人の子どもの理解や支援、子どもたちのかかわり合いを大切にしようという共通姿勢を持って取り組めた。長期間の「かけ算」の学習において数回の検証授業だったが、この共通認識なしには進まなかった。今後は教師同士が課題を共有する場を学校内でどのようにつくっていくかが課題となろう。

教師同士が課題を共有して行動する、つまり協働する教師集団を目指すために、先行事例としてアメリカのPA本部やマサチューセッツ州の三つの学校を視察し、授業や教員研修を知ることができた。そこでの取組は、PAの基本的な考え方である「フルバリュー」の実現であり、「個と全体」が常に意識され、授業の中にも取り入れられていた。子ども一人一人を徹底的に尊重することが学校の教育活動や環境づくり、システムに生かされる大切さを感じた。

6 今後の課題

教師の「協働」についての意識をどうやって育てていくか。検証授業に出向き学年担任の先生方と継続的に話し合ったことや、マサチューセッツ州のミドルスクールを訪問したことから、「協働」するためには教師同士の継続的・日常的なかかわり合いが必要であると痛感した。そのきっかけとなるのが、子どもの姿を具体的に話し合う機会である授業研究ではないだろうか。授業づくりを通して、子どもの成長を見取り、その見取りを教師同士が具体的に率直に話し合う場を持つことが大切である。そのためには、記録の仕方など工夫して行かねばならない。

在籍校では「協同担任制」として、学年のクラス数より1人多い教師数で各学年を受け持っている。常に授業を公開し合ったり支え合ったりしているわけである。この環境を生かすには、その中での「気づき」を教師同士が出し合い、次の活動に生かしていく工夫をすることが必要であろう。相互の信頼と尊重し合う関係を育み、協働し合う教師集団をつくっていくとする意識の共有が図られることによって、子どもの「学び」を豊かにしていく様々な取組が積極的に行われるようになると考えられる。

そして、話し合う際にはPAJのフィードバックモデルに則って、互いに尊重しつつ具体的に話し合うことが教師の気づきにつながりやすい。これは今年在籍校で検証授業や校内研修に参加したり、マサチューセッツ州の学校を訪問したりしての感想だが、このフィードバックモデルのようなふりかえりの仕方は、自分自身が経験してみると次はこうしようと意欲の湧くものだった。グループカウンセリングの一つでもあるPAのこの手法によって、教師自身の心の安全も保障され、目に見える具体的な場面をふりかえることで教師自身の気づきが多くなるからではないだろうか。

授業研究をきっかけとして学級が開かれ、子どもたちの姿を教師集団で見つめることにより、課題を共有して解決に向けて共に行動できる。そのような教師集団の一員となり、子どもたちと向き合っていきたいと思う。

【参考・引用文献】

- ※1 本研究の執筆にあたっては、アメリカ・マサチューセッツ州の三校（Minuteman Regional High School、Waring Middle School、Solomon Lowenberg Middle School）において入手した学校便覧およびフィールドワークによって収集した資料、教師へのインタビューを参照した。
- ※2 Waring Middle School
所在地 35 Standley Beverly MA 01915
生徒数約 150 名（第 6 学年から第 10 学年まで）、教師常勤 15 名、非常勤 15 名の私立学校。
- ※3 フィードバックモデル（P A J）
- ・状況を説明する（明確に、詳細を）
 - ・行動を説明する（私は～に気づいた、私は～を見た など）
 - ・それによってどんなに感じたかを説明する（“私は” から始まる言い方で、正直に）
 - ・必要な場合には、他の方法を提案する（建設的なオプションを提案する）
- ※4 Solomon Lowenberg Middle School
所在地 35 Standley Street Beverly MA 01915
ボストン郊外にある公立学校。
1970 年代からの取組として、P A の手法を用いて「相手を信頼すること」「人間として尊重すること」「なかまと協力してフルバリュウすること」を学校の方針にした。そして、自分の価値を理解し生きるための「読書力」「理解力」及び自分の考えを「表現する力」に重点を置き、取組を始めた。1980 年、体育教師である Ms. Karin Taylor は全校にフルバリュウチームを作り上げるプロジェクトを開始、総合学習の視点を展開したその取組で全米優秀教師賞を授与された。
本年度の取組として、一つの大きな特徴は「読書力」「理解力」及び自分の考えを「表現する力」に重点を置いている点である。訪問時の期間のテーマは「詩 Poetry」で国語の時間に限らず体育、美術、コンピュータなどすべての時間で「言葉」に対して配慮された取組がされていた。掲示物も生徒の作品が多く掲示されている。美術の時間に描いた水彩画の色紙に国語科の学習での俳句を書き込んだり、体育の時間でも活動と言葉とが結びつくように壁にワードボードをかけたりしている。学びの瞬間をとらえて効果的に支援していこうとする環境づくりがされていた。
- ※5 Read 180 言語学習支援システム
- ※6 佐藤学 「学び」から逃亡する子どもたち（岩波ブックレット、2000 年）
教育改革をデザインする（岩波書店、1999 年）
授業を創る 学校が変わる～教師たちの挑戦～（小学館、2003 年）
- ※7 難波克己 「フルバリュウスクールを目指して」（P A J リーフレット、2002 年）